

先行・地域貢献型マルチサイクリングクラブ山口

展開指針／背景～経緯～理念～補完

§ 1. 背景:「第一次ブームからの忘れ物」

～昭和後半の30年間と平成の30年間を足して迎えた還暦ライダーも知らない昭和31年の第一次サイクリングブーム。モータリゼーションの波に襲われ1年半で終息。マナーアップとインフラ整備は、その時からの忘れ物。自転車活用推進法が施行された今も、自転車市民権獲得登頂ルートを探して麓をウロウロしている状態で、それらも昭和から変わらず。そしてサイクリングの法的根拠



Fig.1(毛利チャレンジ&サイクル県やまぐち Project 後継企画)

が曖昧な「日本の実情」の遠因となっている。～ ここまでは2019年1月作成の Fig.1 からの書き写しで、「日本の実情」は「道路事情:インフラ」、「休日事情:ソフト」、「供給事情:ハード」、「文化事情:ハート」と多角的に、自転車市民権獲得を阻む壁として存在し、第一次サイクリングブームからの忘れ物(宿題)となっています。

それは「日本的サイクリング(※注1)」を「考察」した Fig.4 にありますが、平成初頭のMTBブームでそれまでの「サイクリング」に対する考え方が Fig.2 のように変わったのではと改めて気づき、「日本の実情」の「背景」に加えたいと思います。

※注1: 日本的サイクリング≡自転車の遠乗り(子どもの遊び)ノ欧米(UCI)の「サイクリングとは、レースを含むスポーツサイクリング全般」と言う考えに比べて狭義

確かに還暦ライダーはMTBブームの渦中に居て、子どもの遊びが大人の遊びになり、自転車文化も向上するのではと感じました。しかし、嫌な予感が的中しMTBブームは失速。次に訪れた地球温暖化を意識したエコ系自転車ブームでは、歩道走行と車道走行の矛盾が浮き彫りに。それは世紀が変わる前後の話で、その頃、中上級者向けに「MTBラリーレイド」や「ファストランブルベ」をフランスから日本用にアレンジして導入。しかし警察からは資料を返戻扱いされ、自転車関連団体からは時期尚早と言われ、一部マニアに支持されたものの、そのことを知る人は多くありません。

その「日本の実情」に合った、年齢性別車種不問で楽しめる自転車遊びとして考えた『THT26◆自転車さんぽ (Fig.6 左上)』は、スポーツ利用と日常利用の狭間に位置する、警察も追認するグループサイクリングで、「ゲーム旅◆かるたドライブ」などにも応用しながら、集大成として山口きらめき財団の助成を受け「毛利チャレンジ 2018」を実施しました。その総括★の中に「点在する地域資源を巡る移動手段およびスーパー先達の確保」があり、また「サイクル県やまぐち Project」の関連企画★を考えるに当たり、「道路の自由使用と目的外使用」も浮上し、サイクリングの法的根拠 (Fig.6 下部) の曖昧さを再認識しました。

<p>MTBの登場以前は、自宅を出て、日帰りで名所を巡る、いわゆる自転車の遠乗りであり、目的地までのアプローチも自転車旅の一部として楽しんでいた。また、クラブランと呼ばれる、リーダーが誘導する日本的な狭義のサイクリングが主流だった。</p> <p>ドアツードアの日本的サイクリング</p>	<p>After MTB</p> <p>シックスホイールライフのスポーツサイクリング</p> <p>MTBブームの相棒にスキー場の夏場利用があった。アプローチが苦手な極太タイヤにあって、自動車への積載方法も個性になって、2輪+4輪=6輪ライフが定着し、他のスポーツ同様、専用施設での世界基準の「遊び」が主流になる客だったか!?</p>
<p>Before MTB</p> <p>MTBブーム失速の要因は「第一次ブームからの忘れ物」とほぼ一致。 ⇒「わが国サイクリング史の一断面」のアンダーライン部参照</p>	

Fig.2(日本的サイクリングとスポーツサイクリング)

その「日本の実情」に合った、年齢性別車種不問で楽しめる自転車遊びとして考えた『THT26◆自転車さんぽ (Fig.6 左上)』は、スポーツ利用と日常利用の狭間に位置する、警察も追認するグループサイクリングで、「ゲーム旅◆かるたドライブ」などにも応用しながら、集大成として山口きらめき財団の助成を受け「毛利チャレンジ 2018」を実施しました。その総括★の中に「点在する地域資源を巡る移動手段およびスーパー先達の確保」があり、また「サイクル県やまぐち Project」の関連企画★を考えるに当たり、「道路の自由使用と目的外使用」も浮上し、サイクリングの法的根拠 (Fig.6 下部) の曖昧さを再認識しました。

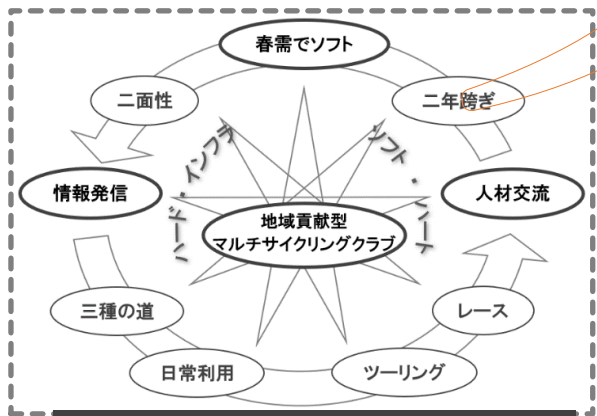


Fig.3(LCMCC 持続化イメージ図/サークルナイン)

そのため、自転車市民権獲得のルート分析に必要な「ハード」「ソフト」「ハート」「インフラ」を凝縮した「テトラバランス (Fig.6 右上)」の共通認識化を急いでも、「日本の実情の壁」は厚く、四すくみ状態のため、戦略の見直しを痛感。それを一旦解体し、玉石混交は覚悟の上で自転車ソフト充実の実績作りに舵を切り、「地域貢献型マルチサイクリングクラブ」を山口県で先行実施し、その持続化のために考えたのが Fig.3 の「サークルナイン」です。